

つ、あるをわかき人々そぼれとりくふさるべきかうものばかりして、御かはらけまいる、

〔河海抄^{十三}若菜〕つばるもちるなしかうじやうの物ども

椿餅椿の葉に入たるもちひなりと云云、椿の葉に合てもちぬのこにあまつらなかけてつゝみたるもの、鞆の所にて食する也。

〔東海道名所記^三〕猿が馬場 柏餅こ、の名物なり、あづきをつゝみし餅、うらおもて柏葉にてつゝみたる物也、

〔世事百談〕柏餅

端午の日に柏の葉に餅を包みて、互に贈るわざは、江戸のみにて他の國にはきこえぬ風俗にして、しかも又ふるき世よりのならはしにもあらざるにや、ものに見えたることなし、徳元が俳諧初學抄に、五月の季に見えずか、れば寛永の頃より後のことか、寛文年間のものとおもはるゝ、酒餅論といふ冊子に、彌生は雛のあそびとて、よもぎの餅や、端午にはちまきのもちや、柏餅水無月はじめの氷餅嘉祥の餅云々といふことあり、延寶八年の印本不卜作の俳諧向之岡に、柏餅の句あり、

餅なりけふ世人はをみがく王がしは

兼豊

押ならべ兩葉が間やかしはもち

水巴

延寶九年の印本言水作の俳諧、東日記に、

端午の御祝儀として柏木の森冬枯れそむ

盲月

井樓の山や梢の四方のかしはもち

兼豊

これらの句によりておもふに、この頃よりあまねく節物となりけんもしるべからず、さて予過ぎし文化のころ、西遊せしをりから、豊前の中津にて、端午の日にあひたりしが、菝藪の葉に餅をつゝみて家ごとにもこしらへ、餅あき人も賣れるを見たり、名をば何といふにか問はざりし、案